注意事項

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。
小説の作者・「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【タイトル】
Ｄｅｖｉｌ　Ｍａｙ　Ｎａｎｏｈａ

【作者名】
アーカード

【あらすじ】
この話はジュエルシードを巡って最強のデビルハンターであるダンテと幼き魔法少女高町なのは、ダンテの兄バージル、そしてなのはのライバル、フェイト・テスタロッサとが織り成すバトルストーリーです。
駄文ですが読んで感想・ダメだし等をいただけたら嬉しく思います。
因みにＳｔＳまで書き込む予定です。
またＤＭＣ４、ベヨネッタともクロスを考えてます。
因みに亀更新です。
因みにですが、バージル兄さんが愛に目覚めます。
ですので、バージルは、こんなこと言わないよって言うシーンが多々出てくると思うので、そこはご容赦下さい。

それでは、Ｄｅｖｉｌ　Ｍａｙ　Ｎａｎｏｈａ　始まります！

第1話

〈1〉

流れる川の真ん中で剣を構える二人の剣士。

紅の剣士、ダンテ，

蒼の剣士、バージル，

二人は、それぞれの武器である、リベリオン，と、フォースエッジ，を手に睨み合っている。

「俺たちが受け継ぐべきなのは力だけじゃない、もっと大切な・・・誇り高き魂だ!!」

ダンテは、双子の兄であるバージルに説得の言葉を投げかける。

「その魂が叫んでる、あんたを止めろってな!!」

バージルは、笑いながらダンテに返事を返す。

「残念だが俺の魂はこう叫んでる。」

――I need more power!（もっと、力を・・・!）――

バージルの言葉を聞いたダンテは、天を見上げながら消え入りそうな雰囲気で呟く。

「いつから違ったんだろうな、双子なのに・・・。」

「さぁな、だが生憎と口で語れることなどたかが知れてる。」

言葉を交わし終えると、二人はそれぞれの武器である、リベリオン，と、フォースエッジ，を握る。
少しの睨み合いを終えると、二人は、剣を構えて間合いを詰めるために走り出した。
二人は、二回、三回とぶつかり合って金属のぶつかり合う音が木霊する。
永遠に続くと思われた打ち合いも、ダンテがバージルを吹き飛ばしたことで終わりを告げる。
バージルを吹き飛ばしたことで、二人の距離が大きく開いた。
二人とも肩で大きく息をしている。

「立てよ、あんたの実力はそんなもんじゃないだろ！」

バージルは、渾身の力を振り絞りフォースエッジを構え、ダンテに向かって走り出す。
ダンテもリベリオンを構え、バージルに向かって走り出した。
二人が交差した瞬間、リベリオンの刃がバージルの体を斬り裂いた。
バージルの手からフォースエッジが零れ落ち、地面に突き刺さった。
リベリオンの軌跡の後を鮮血が尾を引き、一拍遅れて吹き出る血が水に流されて奈落へと落ちていく。
その血と一緒に胸元から零れ落ちる物が目に入ったとき、バージルは、薄れゆく意識の中でそれを掴み取った。
スパーダの力を継ぐ者の証であり、亡き母の形見である、アミュレット，

「これは俺の物だ、誰にも渡さない・・・!!」

アミュレットを握りしめたバージルは、一歩、一歩と魔界へと続く滝壺へと歩を進める。

「待て、バージル！」

バージルの異変に気が付いたダンテがバージルに走り寄るが、闇魔刀（やまと）を突き付けてそれを拒んだ。

「もうすぐ人界に通じる道が閉じる。お前も魔界に飲み込まれたくはなかろう？」

そう言いながらもバージルは、一歩、一歩と後ろに下がっていく。

「俺はここに残る・・・親父が生まれ育ち愛した魔界に・・・。」

バージルは、ダンテにそう言い残すと魔界に通じる奈落へと身を投げた。

ダンテが手を伸ばし、兄であるバージルを助けようとするが、バージルは、手にしていた闇魔刀（やまと）を横に振りぬいてダンテの掌を浅く斬りつける。

最後の最後で明らかなる拒絶の意思を示したバージル。

ダンテは、斬りつけられた手を悔しそうに握りしめた。

そしてバージルは、徐々に濃くなる魔界の気配を感じながら意識を失った。

〈2〉

漆黒の闇の中で目覚めたバージル。

闇の中で浮かんでは消えるダンテの姿。

――――消えろ・・・テ

暗闇にも映えるその姿に向かってバージルは叫ぶ。

――――――消えろ・・・ンテ

答えを返さぬ我が弟に力の限り叫ぶ。

――――――――消えろ、ダンテ!!

バージルが目を覚ますと、眼前には白い天井が広がっていた。
バージルは、大汗をかいていた自分の額を掌で拭った。
掌に汗の生暖かく、湿った感触が残る。
それと同時に、自分の脇腹を覆うように包帯が巻かれ簡単であるが治療されていることに気が付いた。
その後、自分の居場所を確認するために周囲を見渡す。
ベッド、ポール状のハンガー掛け、最低限の家具しか置かれていない殺風景な部屋に寝かされていることが分かった。
枕元には閻魔刀（やまと）が立てかけられており、ハンガー掛けには自分の纏っていた蒼いロングコートが掛けられていた。
バージルは、体を起こし、ベッドから降りようとすると、オレンジに近い茶髪の髪色の女性が戸口から顔を覗かせた。
バージルは、素早く閻魔刀（やまと）を手に取ると臨戦態勢を取る。

「フェイト、目が覚めたみたいだよ!!」

その女性は、部屋の外にいるフェイトと呼ばれる相手を呼びに行くと間もなくして金髪ツインテールの少女が部屋に入ってきた。

「それじゃ、包帯とか取り替えないと・・・。」

「俺に近づくな――――!!」

バージルは、フェイトと呼ばれた少女に閻魔刀（やまと）の切っ先を突き付ける。

「えぇっと・・・武器を下げてもらえませんか。じゃないと包帯も取り替えられないし、傷の手当てもしないと・・・。」

オドオドしながらもバージルの言葉に真剣に答えるフェイト。

「ここはどこだ。テメンニグルは・・・。お前は何者だ?」

続けざまにぶつけられるにフェイトと呼ばれた少女は、困惑した表情を見せる。

「ちょっと、あんたを助けてやったフェイトに対してそんな態度は無いんじゃないの!?」

「やめてアルフ、その人ケガしてるんだよ。私なら大丈夫だから・・・ねっ。」

アルフと呼ばれた女性は、フェイトと呼ばれた少女の言うことを聞き、一歩後ろに下がる。

「私の名前は、フェイト・・・フェイト・テスタロッサです。テメンニグルっていうのは、なんだか分からないですけど、ここは、日本の海鳴市っていうところです。」

フェイトの話を聞いたバージルは、テメンニグルでのダンテとの闘いの後を思い出していた。

(確か・・・ダンテとの闘いに負けた俺は、魔界に通じる奈落に落ちたはずだ。なぜ・・・?)

バージルの頭の中には、なぜ!? といった疑問が頭の中を廻ってい

た。
　フェイトの言葉が耳に届かないくらい集中して考え込んでいたバージルであったが、現状把握のため外に出ることを決め、ベッドから起き上がり、ハンガーに掛けられていた蒼いロングコートを手に取り歩き出そうとしたが、塞がっていない傷の痛みから膝をついて苦悶の表情を浮かべる。

「無理しちゃダメですよ。傷だって塞がっていないのに・・・。」

　苦悶の表情を浮かべるバージルに走り寄ろうとするフェイトだったが、彼が突き付けた閻魔刀（やまと）がそれを遮った。

「俺に近づくなと言ったはずだ!!」

　脂汗をかきながらも、フェイトに敵意を向けるバージル。
　そんなバージルを見つめるフェイトだったが、少しの間の後に彼女は、突き付けられた閻魔刀（やまと）の刃を素手で掴んだのだ。
　その行動には、アルフだけではなく、使い手のバージルも驚愕の表情を隠せずにいた。
　そんなフェイトに対して‘放せ！’と圧の掛かった口調で言うバージルだが、フェイトは話すどころか握る力を強めた。
　フェイトの手から流れ出た血が、閻魔刀（やまと）の刃を伝って鍔のとこまで届く。
　無言のフェイトと睨み続けるバージル、ただならぬ二人の雰囲気を打ち壊したのはフェイトだった。

「あなたが傷の手当てをさしてくれるまで放しません。」

　静かだが力強いフェイトの言葉に、折れたのはバージルだった。

「すきにしろ・・・。」

静かに呟いたバージルを見て、抵抗はないと判断したフェイトは、掴んでいた手を放してバージルの元に駆け寄った。
傷口から滲み出る血液が、巻かれている包帯を赤く染める。
フェイトとアルフは、肩を貸してバージルをベッドまで運ぶ。
途中バージルがポツリと呟いた。

「・・・だ。」

聞き取れなかったフェイトは、聞き返す。

「バージル、俺の名だ。名を名乗れない程、礼儀知らずじゃない・・・。」

バージルの名を聞いたフェイトは、嬉しそうに笑みをこぼした。

〈3〉

フェイトとバージルが出会った翌日。
海鳴市に一人の男性がやって来た。
紅いロングコートを纏い、道行く人が程の背丈と巨大なトランクケースを手にし、銀髪碧眼が特徴的な男性。
男の名は、ダンテ、便利屋兼デビルハンターを営んでいる。
何故、デビルハンターである彼が日本の海鳴市にいるのか。
ダンテは、それまでに至る経緯を思い出していた。

「ジュエルシード、なんだそりゃ？」

ダンテが営む事務所、Ｄｅｖｉｌ　Ｍａｙ　Ｃｒｙ、には、同業者である、レディ、と相棒の、トリッシュ、が集まっている。
ダンテは、お気に入りの事務机に両足を乗せ、好物のピザを食べて

いる。
レディは、そんなダンテの元に資料代わりの写真を机の上を滑らすようにして手渡す。
それを受け取ったダンテは、その写真に目を通す。
軽く目を通すと机の上を滑らせて再びレディに写真を返した。
「あいにく宝石に興味はない。」
「これは、ただの宝石じゃないのよ。」
「宝石の形を模した‘魔具’よ。正確に言えば、魔力を宝石状に加工・圧縮したものとでも言えばいいかしら。」
「これが魔具ね。それで、いつから悪魔達が宝石細工を始めたんだ？」
ダンテは、もう一度、写真を一瞥すると、いつものように軽口をたたく。
「だから、ただの宝石じゃないって言ってるでしょ。このジュエルシードは、持ち主の考えや欲望を酌んでそれを現実にしてしまう力があるのよ。」
「そいつは物騒だな。で、この物騒な物はどこにあるんだ？」
「日本・・・。正確には言えば海鳴市っていう街よ。今回の依頼は、このジュエルシードの回収よ。悪い依頼じゃないし、受けてくれない？」
ダンテは、机の上に置かれていた雑誌を手に取り、それを読み始める。

「日本ね・・・。それで、なんでこの依頼を持ってきたの。悪い依頼じゃないなら、あなたが受ければ良いじゃない。」

トリッシュがレディに問いかける。

「私が受けれるならそうしたわ。でも、依頼主はダンテを指名したのよ。」

「俺を・・・？」

「えぇ、仲介者を使って私に接触してきたから詳しく相手のことを知ることはできなかったわ。分かったのは、依頼相手がとある組織ってことだけ・・・。」

「・・・ところで、俺に依頼を持ってきたってことは、‘あれ’が絡んでるんだろう？」

「えぇ、ジュエルシードの魔力に引き寄せられてかなりの数が集まっているみたいよ。」

軽くため息を吐き、椅子から立ち上がるダンテ。

「トリッシュ!!」

そして、相棒である女性の名を呼ぶが、返答が無かったため後ろを見ると、‘そこにあるはずの’魔剣・スパーダ’が無く、掛けられていた場所に‘現地集合’と口紅で書かれていた。

そんなことを思い出しながらダンテは、軽くため息を吐いた。

「ややこしい事にならなきゃ良いが・・・。」

そう呟きながら街を歩いていく。
街を歩いていると、あることに気が付いた。
上位悪魔に匹敵する魔力を持った何かが街中を移動している。
一瞬、ジュエルシードかと考えたダンテだったが、それが魔具である以上、普通の人間が触って、持ち運べるものじゃないため、その考えを即座に否定する。
その魔力の正体に興味がわいたダンテは、その魔力の正体を確認するため、力の波動が流れてくる方角に足を向けた。

〈4〉

上位悪魔に匹敵する魔力を持つ何かである。
ダンテは、その魔力の持ち主をすぐに見つけることができた。
魔力の主を発見したダンテの中を強い驚きの感情が支配した。
なぜなら、その魔力の主が、年端もいかぬ少女だったのだ。
魔力だけならダンテが闘った悪魔達とも劣らない力を持った少女は、同年代の少女たちと本屋から出てくるところだった。

「Ｈｕｍ、Ｃｒａｚｙ　Ｇｉｒｌ!!（ぶっとんだお嬢ちゃんだ）」

小声で呟いたダンテは、その少女、高町なのは　に話しかけてみることにした。

「Ｈｅｙ　Ｌａｄｙ（そこのお嬢ちゃん）」

ダンテに声をかけられた少女達は、慣れない英語にオドオドしながらも返事を返そうとしている。
そんな様子を見たダンテは、日本語で話しかける。

「おっと悪い、日本語じゃないと分からなかった？」

ダンテの言葉に金髪の少女，アリサ・バニングス，が頬を膨らませ、不満そうな表情になる。

「えぇっと、何か御用でしょうか？」

白いヘアバンドを着けた少女，月村すずか，がオドオドしながらも用件を聞いてきた。

「海鳴公園ってとこで人と待ち合わせしてるんだが場所が分からなくてね。道案内をしてくれないか？」

「えぇっと、案内するだけならいいかな。アリサちゃん、なのはちゃん？」

「私なら別にかまわないわよ。」

「私も大丈夫だよ。」

すずか達は、アリサとなのはの了承を得たことで、ダンテを海鳴公園まで案内することになった。

第2話

〈1〉

ダンテを海鳴公園に案内することになったなのは、アリサ、すずかの三人は、道すがら自己紹介をしながら、目的地に向かっていた。

海鳴公園は、見晴らしの良い高台にある公園で。休日などは小さな子供を連れた親子でにぎわうどこの街にもあるような公園である。

「ここが海鳴公園です。」

ダンテが到着すると公園の敷地内に人の姿は無かった。

それを確認したダンテは、道案内をしてくれた少女達に礼を言った。

「助かったぜ、嬢ちゃんたち・・・。この礼は嬢ちゃんたちがもう少し立派なｌａｄｙになったら返すぜ。」

ダンテは、少し乱暴になのはの頭を撫でた。

ダンテは、公園の中央に歩いて行く。

それを見送ると、三人は公園を後にした。

公園からの帰り道、なのは達は、それぞれの意見を述べながら帰っていた。

「まったく何なのよ、あのきざったらしい態度は――――！」

「まぁまぁ、アリサちゃんそんなに怒らなくても・・・。」

「何が立派なｌａｄｙになったらよ、失礼しちゃうわね。」

「でもカッコイイ人だったね。背なんか高くてモデルさんみたいだったし・・・。」

「なに、すずかは、あんな男が好みなの？」

「ち、違うよ！」

それぞれがそれぞれの感想を述べる。

「でも、確かにちょっぴり格好良かったよね！」

「えぇー、なのはまで、あんな軽そうな男が好みなの!?」

「別にそういう訳じゃないよ！」

なのは達がそれぞれの感想を言い合っていると、その穏やかな空気をぶち壊す一発の銃声が響き渡った。

「何、今の音！」

「今の音って銃声だよね！」

銃声を聞いた少女達の表情は一斉にこわばった。

しかし、なのはだけは冷静だった。

『ユーノ君聞こえる!?』

『うん、聞こえてるよなのは。』

『微弱だけど海鳴公園の方から魔力反応を感じるんだけど』

『うん、僕の方でも確認できてる。何か強い魔力に引き寄せられて集まってきてるみたいだ。ジュエルシードかもしれないからなのはは、僕が行くまで現場近くで待機を・・・』

『そんな事出来ないよ！　さっき公園に案内した男の人を助けに行かなきゃ！』

そう言うとなのは、一方的にユーノとの通信を切った。

「ごめんね。アリサちゃん、すずかちゃん、私行かなきゃ！」

そう言い残しその場から走り出すなのは
アリサとすずかの呼び掛ける声も聞こえないほどに速くその場から走り出していた。

〈2〉

なのはが海鳴公園に向かって走り出していた少し前に時間は遡る。
ダンテは、少女達が去るのを確認すると、近くにあったベンチに腰掛け、公園から見える街の景色を眺め始めた。
しばらくすると、そんな彼の元に一人の女性が現れた。

「あなたが、街の観光を楽しむなんて以外ね。」

「随分と遅かったじゃないか、トリッシュ！」

「あら悪い、私もちょっとした観光を楽しんでたのよ。」

やって来たのはダンテの相棒である女性、トリッシュであった。
二人は、いつものように軽口を言い合うと改めて本題に入った。

「ジュエルシードの場所は掴めたの？」

「いや、着いてから色々歩き回ったが全く手がかりなしだ。そう言うお前はどうなんだ？」

「私の方もさっぱり・・・。」

「だが、面白そうな奴なら見付けたぜ！」

「あら、どんな奴よ。」

「ドでかい魔力を持った小学生だ。」

「・・・あなた、いつからロリコンになったの？」

「生憎と俺は、ロリコンじゃないが子供が好きなのさ。」

また、軽口を言い合うとダンテはおもむろに立ち上がって、近くにあった木陰に移動した。

そして木上を見上げるダンテ

「どうやら、捜し物は以外と近くにあったみたいだぜ。」

その視線の先には青白く光る小さな宝石が木の枝に引っ掛かっていた。

そしてその光に集まるような異形の存在もダンテは感じ取っていた。

「トリッシュ！」

「イカれたパーティーの始まりだ！」

そう言うと空に向けて自身の武器であるエボニーを発砲した。
すると空からジュエルシードと思われる宝石とともに、巨大なハサミが空から降ってきた。
降ってきたハサミは、地面に刺さるとガラス細工のように粉々に砕けてしまった。
そのハサミの持ち主であるシン・シザースは、短い悲鳴を残し砂となって消えた。
すると次の瞬間には、互いがそれぞれの銃アイボリーとルーチェ＆オンブラを抜き構え背中合わせの状態になる。
周囲には、おびただしい数の悪魔が宙を漂い標的であるダンテとトリッシュに視線を集め、二人に殺到した。
臨戦態勢をとる二人だったが、そんな二人を助ける援軍がダンテとトリッシュに殺到する悪魔の群れに向かい一発の魔力砲を発射した。
その魔力砲のお掛けで半分近いシン・シザースを殲滅した。
二人は、その魔力砲の発射主に視線を向ける。
そこにいたのは、小さなフェレットを従えたダンテにも見覚えのある少女だった。

「Ｃｒａｚｙ　Ｇｉｒｌ！」

Ｃｒａｚｙ　Ｇｉｒｌ呼ばわりになのはもムッとしたのか簡単な自己紹介をする。

「Ｃｒａｚｙ　Ｇｉｒｌじゃありません！　私は高町なのはって言います！」

「なのはか・・・良い名じゃねーか。俺の名はダンテ、そしてアイツが相棒のトリッシュ」

「まぁ、早速来てくれたことや、その格好についても聞きたいことがあるが、ここから先はＲ指定だ。まずは、お家に帰りな！」

そう言うとなのはの顔面に向けてエボニー&アイボリーを向けた。
なのはの耳近くで炸裂した銃の発射音が彼女の鼓膜を震わせた。
気が付くと、彼女の後ろに迫っていたシン・シザースの額に銃弾がめり込み、シン・シザースを砂へと変えていた。

「お嬢ちゃんじゃ力不足だ下がってな！」

それからはなのはの目に写る光景は信じられないものだった。
無数に飛び交う悪魔達をダンテ達は、一匹残らず銃だけで殺し尽くしたのだ。
例えるならば銃同士の演舞
悪魔達を掃討したダンテとトリッシュに向け、もしもの時に備えレイジングハートを構える。
そしてダンテが持っていたジュエルシードに視線を向けた。

「あの、ダンテさん。その手にしてる青い宝石何も言わずに私達に渡してもらえませんか？」

「・・・嫌だといったら」

「それは、とても危険な物なんです。」

「知ってるさ。ジュエルシードって言うんだろ・・・」

「それじゃあ、何で渡してくれないんですか!?」

「生憎とこちらも仕事でね。こいつが必要なのさ！」

そう言いながらダンテは、高台にある落下防止用の安全柵を飛び越えた。

海鳴公園は、山の中腹にあるため、落下防止用の柵から落下すればただではすまない高さにある。
しかしダンテは、そんな事はお構いなしといった表情で柵から飛び降りたのだ。
あわててなのはは、柵に駆け寄ったが、そこには、ダンテの姿はなかった。
その代わり、何処からかダンテの声が響き渡ってきた。
「運があれば、またどこかで会えるだろうさ！」
その一言だけ残しダンテもトリッシュもその場から姿を消していた。
その後、慌ててなのはの後を追って来たアリサとすずかに、心配かけさせるなとこっぴどく怒られたのであった。

〈3〉

海鳴りの街のとあるスーパー
そこにフェイトとバージルはやって来ていた。
主な目的は非常時の医薬品を購入するため、そして当面の食料を得るためである。
二人が店内に入ると店内にいた者達の視線が集まる。
それも当然である。
入ってきたのはモデルの様な長身と特徴的な銀髪の青年と同じくモデルの様な容姿をした金髪の少女の二人組だったのだから無理もない。
二人は、周囲の視線に目もくれず、目的の医薬品コーナーに歩を向けた。
そこで粗方の医薬品を買い込むと、次は食料品コーナーに向かって歩き出した。
「ねぇ、バージルは、どんな食べ物が好き？」

フェイトの問いにバージルは、簡単かつ明瞭に答える。

「何でも良い。特に嫌いな物はない。」

それを聞くとフェイトは、片っ端から冷凍食品をカートの中に放り込んでいく。

それを見たバージルは、一瞬顔をしかめた。

幼い頃に母から言われていた言葉を思い出す。

「そんな食材ばかりで味気無くはないか？」

「なんで・・・？」

「幼い頃に母から言われていたことがある。」

「なんて言われてたの？」

「野菜もしっかり食べなさいっと言われていた。」

それを聞いたフェイトは、クスりっと笑った。

「やっと自分の事話してくれたね。」

フェイトは、嬉しそうにバージルを見つめる。

バージルは、ばつの悪そう表情をすると、少しだけフェイトから距離をとった。

フェイトは、生鮮食品のコーナー、野菜コーナーにも足を向け、大量の食品をカートに放り込むと、会計を済ませるべくレジコーナーに向かった。

カートから溢れんばかりの荷物を見たバージルは、一言フェイトに

問い掛けた。

「金は足りるのか？」

「お金なら大丈夫。でも、少し買いすぎちゃったかな？」

「男一人増えたくらいでこの量は、買いすぎだと思うが・・・」

「うん、そうかもしれない・・・けどね」

フェイトは、バージルの問いに少し気恥ずかしそうに頬を染めながら言った。

「一緒に食事をしてくれる人が増えたのが嬉しくて、つい・・・ね」

フェイトの言葉にバージルは、人間だった頃を思いだし、ーーー実際は、今も心身ともに半分は人間なのだがーーー嬉しそうに鼻で笑って答えを返した。

「あぁ、今、笑ったでしょ！　バージルのバカ・・・」

そう言う言葉のやり取りをしながら、大量の荷物を持ち帰路に着いた。

〈4〉

マンションに帰ってきた二人を出迎えたのはアルフだった。

「二人ともお帰り」

「ただいまアルフ」

大量の戦利品を一度キッチンに運ぶと、フェイトとアルフは、荷物の片付けに入った。
二人が荷物片付けに悪戦苦闘していた最中、バージルは、リビングに飾られている写真を見ていた。
そこには、今より幼いフェイトとそのフェイトに寄り添う様に写る女性の姿が写されていた。
バージルは、そこでフッと疑問に思ったことを口にした。

「フェイト、両親はどうした？」

バージルの問いに片付けをしていた彼女の手が止まる。

「父さんはねいないの。母さんも今は別の場所で暮らしていて今は私とアルフだけで暮らしているんだ・・・」

フェイトの重い口調にバージルは、一言だけ詫びの返事を返した。

「すまない。辛いことを聞いたな」

「うん、でも良いの、今はアルフと・・・バージルもいるし」

フェイトは、嬉しそうに言った。
両親がいないのは幼いフェイトにとって何よりも辛いことのはずだが彼女は、屈託のない笑みをバージルへと向け答えた。

「その言い方だと俺は、ついで扱いのようだが・・・」

バージルは、笑いを噛み殺し、フェイトに意地悪な問い掛けをした。

「そっ、そんな事はないよ。バージルも私達の家族みたいなものでしょ！」

「家族か・・・」

脛に傷を負う身であるバージルを助け、自分の事を詮索しないフェイトとアルフ

そんな二人に対し、バージルは、忘れかけていた一つの感情を思い出していた。

ーーー守りたい、彼女達をーーー

かつての自分と重ね合わせてかバージルは、二人に強い感情を抱くようになっていた。

しかし、彼にとってこの気持ちが意味するとこは何なのかその日は理解することができなかった。

第3話

〈1〉

海鳴公園でダンテと熱烈な別れをした後、アリサとすずかとも別れ、なのはは一人帰路に着いていた。

夕暮れがなのはの帰り道を照らす。

ダンテと別れた後にきた異様なまでの疲労感

たった一発、ディバインバスターを放っただけだったが、あの得体の知れない闇の者との遭遇が幼い彼女の精神力を磨り減らしたのは間違いなかった。

彼女は、重い足取りで両親の営む喫茶店ーー翠屋ーーの戸をくぐった。

「ただいま」

帰りの返事に疲れを残し、仕事中の両親に帰宅の報告をする。

「お帰りなのは」

「お帰りなさいなのは」

両親の問い掛けになのはは、再び重たい口調で返事を返す。

「ただいま」

もうすぐ夕飯時でもある時間に差し掛かっているせいか店の中は閑散としていた。

客と言えば、なのはから見て店の奥に陣取り座りながら、ストロベリーサンデーを頬張る、真っ赤な革製のコートを着こんだ外人がいるくらいで・・・

なのはは、短い人生で初めての二度見と言うものをしてしまった。
そこにいたのは、先程まで公園で巨大な二丁拳銃を振り回し闇の者を塵へと変えた男がいたのだ。

「あぁぁぁぁぁぁぁぁ!!」

なのはは、指差し店中に響き渡る絶叫をした。
両親に咎められようともなのはは、外人を指差したまま動きを止めている。

「よう、なのは、三十分ぶりだな」

そんな中、なのはに対し挨拶をする男、ダンテの姿があった。
少しの間の後、硬直から解けたなのはは、ダンテに詰め寄った。

「何でダンテさんが家にいるんですか!?」

「運があれば会えるだろうって言っただろう」

そうニヒルな笑みを浮かべながら囁くダンテ
そんなダンテの元になのはの父、高町士郎がやって来た。

「困りますよダンテさん。うちの娘をたぶらかさないでくださいよ。」

「士郎、俺は子供好きなだけだぜ。たぶらかすだなんて事する訳無いだろう」

次いで母、桃子がやって来た。

「まぁ、ベッピンさんな奥さんの方なら分からないがな・・・」

「まぁ、誉めてもなにも出ませんよ。」

まるで友人同士の会話に驚いたなのはは、近くにいた母、桃子にこの疑問を問い掛けた。

「お父さんもお母さんもダンテさんと知り合いなの？」

「えぇ、そうね。知り合いと言えば知り合いかしら」

「なのはは、父さんが昔やっていたボディーガードの仕事の事覚えているかい？」

「うん、覚えてるよ。」

「その時に知り合った古い友人だよ。」

ダンテとの関係を簡単に説明する士郎

「まぁ、そう言う事だ宜しくな、なのは。」

「えぇぇぇぇぇぇぇ!!」

こうして、翠屋に本日二度目の絶叫が轟いたのだった。

〈2〉

新月の夜

月明かりもない夜中に鬱蒼と生い茂る森を歩く二人の少女

フェイトとアルフ

「バージルを置いてきて本当に良かったのかい？」

アルフは、胸中に抱いていた疑問をフェイトにぶつけた。
「バージルは、元々この件には関係ない人だから・・・」
「でも、腕はたつよ」
「それでも関係ない人を巻き込みたくないんだ。」
フェイトの強い意思がアルフの言葉を押し止めた。
そうこうしていると、二人は目的の場所へと到着する。
「ここにジュエルシードが眠ってるんだね。」
フェイトの問いにアルフは無言で頷く。
森を抜けやって来たのは西洋墓地
月明かりもない墓地は、独特の空気が支配している。
肌にまとわりつくような、ネットリとした空気が二人を包み込む。
「何だか薄気味悪いね。」
深夜の墓地なのだから当然と言えば当然な感想をアルフは述べる。
話し掛けられたフェイトは、無言のまま歩を進める。
するとしばらく歩いてから歩みを止めた。
アルフもそれにならって歩みを止める。
フェイトの眼前には、十字架に磔にされた男性の石像が現れた。
夜露に濡れたその石像の顔は、まるで苦しみに悶え、涙を流しているように見えた。
少しの間、石像を見つめたフェイトは、その胸に光る青い宝石に視線を向けた。
「発動間近みたいだね、早く封印しないと・・・」

フェイトは、己の相棒であるデバイス、バルディッシュを宝石へと向けた。

「ジュエルシード、シリアル・・・」

フェイトがジュエルシードのシリアルナンバーを読み上げようとした瞬間、場の空気がガラリと変貌した。
肌にまとわりつくような嫌な感覚はそのままに、腐敗と死臭を纏った空気が辺りを覆ったのだ。
フェイトは、持ち前の勘で臨戦態勢をとる。

ホォホォホォホォォォォ

墓地全体に響き渡るような笑い声が聞こえてきたのは、彼女が臨戦態勢をとり終えてからだった。
フェイトは、瞬時に索敵魔法を展開して敵の位置を把握することに勤める。
しかし、それが仇となった。

「フェイト！　後ろ」

アルフの呼び掛けに反応し飛び退くと、先程まで立っていた場所の近くにあった墓石が袈裟斬りに斬り倒されていた。
そして彼女達は目にした。
この世のものではない闇の者の存在を
手には大鎌を携え、漆黒のトーガに身を包み、人にとって頭部に当たる部位には、角の生えた頭蓋骨だけが浮かんでいた。

「あ・・・悪魔」

まさにおとぎ話に出てくる悪魔そのものがその場所に立っていたのだ。
戦おうと腕に力を入れるが全く力が入らない、そればかりか震えが止まらず、相棒であるバルディッシュを落としそうになったところを必死で踏み止まる。
フェイトの戦意が喪失仕掛けているところを悪魔は見計らったように再度大鎌による斬撃を仕掛けてきた。
フェイトに避ける気力は残ってなかった、ダメだと諦めもした。
しかし、フェイトにその斬撃が届くことはなかった。
何かが風を切る音の後にカチンと金属同士がぶつかり合う小さな音がフェイトの耳に届いた。
ゆっくりと瞳を開けると、そこにいたのは蒼い革製のコートを靡かせて立つ一人の男の姿
フェイトは、その男の名を大声で叫んだ。

「バージル！」

しばしの間の後、フェイトを斬り殺そうとしていた悪魔は、上半身と下半身を切り分けられ、砂となって消滅した。
フェイトは、自身を救ってくれた男性に走り寄った。
敵の沈黙を確認すると構えていた閻魔刀（やまと）の柄から手を離した。

「あの・・・ごめんなさい」

走り寄ったフェイトが見たのは険しくなったバージルの表情である。
それを見たフェイトは、思わず謝ってしまった。

「なぜ謝る？」

「だってバージルを巻き込んじゃったし・・・」

そう言うフェイトの瞳には彼を巻き込んでしまった後悔からか大粒の涙がたまっていた。

「俺は気にしてない。さぁ、帰ろう。」

バージルの思わぬ優しさに触れたフェイトは、泣き顔から一変して笑顔に変わっていた。

ジュエルシードを封印してから墓地から去ろうとした瞬間、強い気配に当てられバージルは、再び閻魔刀（やまと）を鞘より抜き放った。

「誰だ、こそこそ隠れていないで出てきたらどうだ」

バージルの問いかけに答えたのは、バージルと同じ容姿をした男真っ赤なコートを靡かせ、さほど広くない墓地の出入り口に立っている。

その足元にはフェイトと同い年位の栗毛色の髪をした少女

バージルは、その真っ赤なコートを着た男に見覚えがあった。

忘れるはずもない、テメンニグルでの一戦を・・・

「久しぶりだなバージル。」

「ダンテ。」

二人は、お互いの得物に手を掛け睨み合う。

「何年ぶりだ」

「さぁな、いちいち別れた年数なんて数えるほどおセンチじゃないんでね。」

「何が目的だ。」
「その宝石を渡してもらいたいんだ、こっちも仕事でね」
「断ると言ったら」
「悪いがそれはできない相談だ力付くでも頂いていくぜ。」
そう言うとダンテは、リベリオンを抜き放ち上段からバージルに斬りかかる。
バージルも閻魔刀（やまと）でそれをガードする。
鍔迫り合いの中、後方に飛び退いたダンテは、再度バージルに向けて突撃した。
こんどは、神速の踏み込みから繰り出される強烈な突きがバージルに襲い掛かった。
バージルは、その攻撃をいなし、掌で器用に閻魔刀（やまと）を逆手に持ち帰ると刀の鍔でダンテに打突を加えた。
ダンテは、後方に吹き飛ばされ墓地の墓石に叩きつけられる。
「戦い方は全く変わってないんだな」
「だとしたらなんだと言うんだ。」
ダンテは、苦笑いを浮かべる。
フェイトは、と言うと呆気にとられ見ていた先程の攻防の余韻から抜け出せずにいた。
そんなフェイトにバージルからの言葉が届いた。
「フェイト、早くジュエルシードを封印しろ！」

ハッとしたフェイトは、急いでジュエルシードの封印を行った。
封印を終えたフェイトの元になのはが歩み寄ってきた。

「ねぇ、フェイトちゃん。こんな事もう止めようよ。」

「私は母さんの願いを叶えるために引くことはできないのもう・・・関わらないで・・・」

そう言い残すと黒いバリアジャケットのマントを靡かせて飛び立って行ってしまった。
漆黒の空を見上げてるなのはの元にダンテがやって来る。

「ダンテさん、さっきの人って誰なんですか?」

「何、昔の顔馴染みだよ。」

「さぁ、用事は済んだことだし、さっさと帰ろうぜ、久々にフカフカのベッドで休みたい」

そう言うなのはを引っ張ってなのはの実家に歩みを向けた。

〈3〉

マンションに帰ったフェイト達を待っていたのは話し合いだった。
だが三人がそれぞれ口を閉じ押し黙っている。
そんな中、先に口を開いたのはバージルからだった。

「言っても信じてもらえないと思うが、俺の半分は、悪魔だ。この世界に来る前には魔界への入り口を作るために魔塔テメンニグルを作り上げた。親父の力を手に入れるために・・・」

そんな話を聞いてポカーンとするフェイトとアルフ

「まぁ、信じるか信じないかはお前らしだいだがな」

いきなり同居人が悪魔であることをカミングアウトしたことが大きいのか、絶句の表情から中々二人は戻ってこない。

そんな中、真っ先に戻ってきたのはフェイトだった。

「バージルが悪魔だって言うのにはちょっと驚いたけど私だって秘密隠してたしぬ。私ね、魔導師なの、そしてアルフは私の使い魔なんだ。」

「それであの宝石を集めて何をする気だ？」

「あれは、母さんの願いを叶えるために必要なものだっだの。」

「母さんの願いだと・・・それはどんなものなんだ？」

「詳しくは分からない、だけど母さんの願いだから叶えてあげたいの！」

「そうか、それなら俺を母親の元に連れて行ってほしい」

「ジュエルシードを集める理由をフェイトの母親から直接聞き出し、場合によってはこれを止めさせる！」

急な言葉にフェイトだけではなくアルフも驚いていた。

何故ならバージルの真意が読めなかったからだ。

フェイトは、理由が理由なだけに母親に会わせるのを反対したが、バージルに気押され渋々これを受け入れた。

第４話

〈1〉

次の日、フェイト、アルフ、バージルの三人はマンションの屋上に来ていた。

フェイトの手には母親への贈り物なのだろケーキの入った箱が握られている。

「皆、準備大丈夫？」

フェイトの問いに短く返事をするアルフとバージル

「それじゃあ、行くよ。次元座標固定、目標、時の庭園」

そう言い終わると三人はマンションの屋上から大きな屋敷を彷彿とさせる庭に姿を表した。

「母さんの部屋はこっちだから・・・」

そう言って初めての来客であるバージルを案内しようとしたが、当の本人はそれどころじゃなかった。

強烈な目眩、吐き気、頭痛に教われていたのだ。

いっこうに立ち上がらないバージルに二人が駆け寄った。

「大丈夫バージル？」

「あぁ、少しここの空気にやられただけだ・・・俺の事は気にせず先に行ってくれ」

「分かった、体調が良くなってからで良いから絶対に来るんだよ！」

二人が離れると今度は強烈な耳鳴りがバージルを痛め付ける。
しかし、その耳鳴りは少しずつ何かの言葉になっていくのが分かった。

（スパーダの息子だ許すまじ、裏切り者の末裔生かして返すな）

（裏切り者は殺せ、殺せ、殺せ・・・）

自分を呪う呪詛の言葉を耳元で叫ばれたバージルは、少しゆっくりと立ち上がり閻魔刀（やまと）を杖がわりにしながらフェイト達が歩いていった方に向かう。
どれ位の距離を歩いたろうか、バージルの前には一枚の扉が立ちはだかって現れた。
その扉の前でうずくまるアルフにフェイトがどこに行ったのか聞こうとした瞬間、扉の奥から聞き覚えのある少女の声が悲鳴となって飛来した。
バージルがやって来た事に気が付いたアルフは、バージルにすがり付いて泣き出した。

「バージル頼むよ、あの娘を・・・フェイトを助けてやっておくれ！」

バージルは、アルフの頭を軽く撫でるといつもの調子で部屋の中に入っていった。
中では、バージルの創造以上の事態が起きていた。
宙に吊り下げられたフェイト
そんな彼女に鞭を打ち続ける女
バージルの中で何かが弾けた瞬間だった。
バージルは、神速の踏み込みから繰り出される強烈な抜刀術で鞭の根を切断
次に宙に吊り下げられ、ボロボロになったフェイトを降ろすため、

両手首を縛っているバインドを闇魔刀（やまと）で断ち切った。
宙から落下するフェイトを受け止め床に下ろした後、敵意の矛先である女に視線を向ける。
「お前がフェイトの母親か！」
「えぇ、一応はそうなっているわね」
「微笑ましい家族の再開にしては随分と過激なことをするんだな」
「えぇ、再開も大事だけれど躾はもっと大事よ。私の言い付けを守らなかった悪い子にはね。」
「躾だと・・・フェイトちゃんとジュエルシードを集めてきたはずだが？」
「足りないのよあの程度の数じゃ全然足りないわ！　この大魔導師プレシア・テスタロッサの娘に見あった活躍をしてもらわないと困るのよ!!」
その言葉を聞いたバージルは、抜き身の刃をそのままにプレシアに向かって飛び込み、刃をプレシアの首に押し当てていた。
見ていたものは一瞬の事で理解が追い付かなかっただろうバージルの驚異的な脚力から生み出されたエネルギーは、瞬時の間に体をプレシアの首をはねれる間合いまで飛び込ませたのだ。
ただ単純ゆえ強力な一撃受けプレシアは、狼狽していた。
「もし、次にフェイトに手を出す様な真似をしてみろ、その時は、貴様の首と胴体が離れ離れなっているだろう」
それだけ言い残すとバージルは、フェイトをお姫様だっこで担いで

部屋を後にした。
バージルが去ってからしばらくして、彼女はとある部屋に向かう。
部屋に入ったプレシアの視線に飛び込んできたのは、培養液に浮かぶ一人の少女
プレシアは、その少女にアリシアと何度か呟きながら培養液の中を除き混む。
その培養液が入ったタンクが置かれた部屋にはタンクの他に巨大なものが置かれていた。
それは真っ白で巨大石像である。
神々しさを放ちまるで神のようにそこに鎮座するそれを見てプレシアは叫んだ。
「ムンドゥス様、今のジュエルシードの数ではアルハザードに行くことはできないのでしょうか？」
プレシアの問いにどこからともなく答えが帰ってきた。
できぬ！　早くジュエルシードを集めるのだ一つでも多く
「はい、分かりましたムンドゥス様。必ずや全てのジュエルシードを持って参ります。」
そう言うプレシアの表情はいびつに歪んだ笑みが浮かんでいた。
〈2〉
同日の夜、海鳴市の市街地に来ていたなのはとダンテ、時刻は夜の19時を回っていた。
「多分、この辺のはずなんだけど・・・」
ダンテと一緒に街中を歩きまわるなのは。

「見つからないですね」
「あぁ、そうだな」
ダンテは、空を仰ぎながら、どこか暇そうに呟いた。
「しっかりして下さい、ダンテさん！」
「あっ、あぁ悪い、つい考え事をな・・・」
「何を考えてたんですか？」
「何、刺激の無い散策ってのはつまらないものだなってね」
「もう、しっかりして下さい！」
「悪い、悪い」
なのはに肘で小突かれたダンテは、軽く謝るが、まだどこか上の空のようだ。
その時だった、街の空気が一変したのは
『ユーノ君、これって！』
『魔力流を流し込んで発動させる気だ、こんな街中で無茶な！』
あわててユーノは、広域結界を展開する。
そんな中、街中に立つ高層ビルの屋上に立つ三つの影。
「傷の方は大丈夫なのか？」

「うん、問題ないよ。」

「フェイト・・・ここは、私とバージルだけでも何とかできるから、マンションに帰って傷を癒した方が良いんじゃ・・・」

「傷なら大丈夫だから、気にしないでアルフ」

それだけ言い残すと、フェイトは、発動しかけたジュエルシードの元に飛翔する。

アルフとバージルもビル伝いに跳び移り、目的の場所へと向かって行く。

目的の場所に到着すると、そこには見覚えのある影が二つ、真っ赤なコートを靡かせて立つ男、ダンテ。

白いバリアジャケットを着て立つ少女、高町なのは。

ジュエルシードを挟み向かい合うバージル、フェイト、アルフ。

まさに一触即発の状態の中、先に動いたのは、以外にもなのはだった。

「フェイトちゃん・・・もう止めよう、こんな事・・・」

そう語りかけるなのはにバルディッシュの切っ先を向けた。

明確な敵意の表れである。

意気消沈気味のなのはにダンテが語りかける。

「なのは、こういった奴には言葉は通じないものさ！　こういった奴等には肉体言語で語り合うにつきるぜ！」

そう言い切るないなや握りこぶしを構えバージルの元に飛び込んでいった。

懐に飛び込んだダンテの右ストレートがバージルの顔面を襲う。

しかし、これを最低限の挙動で避け、反撃の一撃を加えるべく、バージルの拳がダンテのボディーを狙う。
しかし、これをガードしたダンテは、バージルのバランスを崩すべくローキックを叩き込んだ。
しかし、この攻撃もバージルが後ろに跳んでこれを回避した。

「やるじゃねーか」

「貴様も少しは成長したようだな、徒手空拳で勝負がつかぬとあらばこれで勝負をつける他あるまい」

そう言ってバージルは、闇魔刀（やまと）に手をかける。
ダンテもリベリオンの柄を握る。
次の瞬間、二人は、神速となってぶつかり合った。

〈3〉

ダンテとバージルがぶつかり合っていた頃、なのはとフェイトも激しい空中戦を展開していた。
逃げるなのはを追うフェイト
そして、フェイトから放たれた魔力弾をなのはは、紙一重で回避しつつ、反撃の機会をうかがっている。
後方を追撃してくるフェイトに対し、飛行中の自分自身に　急制動を掛け、体を反転させると、ディバインバスターの発射体制をとる。
あわてたフェイトは、回避行動に移る。
発射されたディバインバスター、それを紙一重で回避するフェイト
それを回避したフェイトになのはが語りかける。

「フェイトちゃん、もう止めようよこんな事」

なのはの問いかけにフェイトは、黙ったままバルディッシュをなのはに向ける。

「ちゃんと話し合いもしてないよね。私は言うよ、だからフェイトちゃんも教えて、フェイトちゃんの色々な事・・・」

裏表のない、なのはの問い掛けに一瞬、戸惑いを見せるフェイト。

「フェイト、言わなくて良い！　それよりも早くジュエルシードを」

しかし、アルフの声がこれを遮った。
アルフの声を聞いて我を取り戻したフェイトは、空中でなのはと向かい合っていた状態から、慌てて踵を返しジュエルシードがある方へと飛行進路をとった。
なのはも慌ててその後を追う。
その姿を一瞥したダンテとバージルは、先程までの激しい剣撃を止める。

「ずいぶんと余裕そうだな。」

「なに、兄より優れた弟など存在せん。」

ダンテの問いにバージルは、挑発じみた答えを返す。

「なら、その考え改めさせてやるよ！」

そう言ってバージルの懐に飛び込もうとしたダンテ
それを迎え撃つべく閻魔刀（やまと）を振るバージル
二人を予想だにしない衝撃波が襲った。
二人は、その衝撃波が襲ってきた方角に視線を向けた。
そこには、発動しかけたジュエルシードとボロボロになって倒れているなのは、そして、素手で発動しかけたジュエルシードを掴み、これを封印しようとするフェイトの姿があった。

「止めろフェイト！」

バージルがフェイトに意識を向けている間に生まれた隙をダンテは見逃さなかった。

「隙だらけだぜバージル！」

「しまっ・・・！」

次の瞬間、ダンテの持つリベリオンがバージルの体を貫いた。
リベリオンを引き抜くと傷口から大量の血液が吹き出してくる。

「ダ・・・ンテ」

バージルは、そのままダンテの胸の中へと倒れこむ。

「バージル!!」

バージルの危機に先程までユーノと戦っていたアルフは、戦闘を止め、バージルの元に駆け寄った。
しかし、これをダンテが遮る。

「こっから先は家族の問題でね。お嬢さんには、お引き取り願おうか」

この男には勝てない、そう判断したアルフは、ダンテを睨み付けた後、ジュエルシードの封印を終え、満身創痍のフェイトの元に向かう。
倒れ掛けるフェイトを抱き抱えると、こんどは、なのはを睨み付けると、ビル伝いに跳び移りながらその場から立ち去って行った。
フェイトとアルフが去ってから数秒後、なのはに声を掛けるダンテ

「悪いなのは、後は頼んだぜ。」

そう言い残すとダンテは、フェイトを追って行ってしまった。

〈4〉

隠れ家であるマンションにたどり着いたアルフは、帰還早々に頭を抱えていた。

「おい、この家は、客人にお茶も出さないのか」

「誰が客人だよ。無理やり着いて来たくせに」

「そうだったな、悪い悪い」

バージルと入れ替わる形でやって来た客，ダンテ，

到着早々、ソファーに腰掛け、テーブルに足を投げ出して、こう言い放ったのだ。

アルフは、軽くため息をつく。

「それよりもそこを退きなよ。フェイトを治療するんだから」

そう言われダンテは、腰を上げる。

立ち上がったダンテと入れ替わる形でソファーに腰を降ろすフェイト

立ち上がったダンテは、室内の物色を始めた。

そんな彼の視線内に一枚の写真が飛び込んでくる。

「これ、お袋さんとの写真かい・・・・?」

ダンテの問いにフェイトは、黙ったまま頷いた。

「優しそうなお袋さんじゃないか」

「優しいもんか、そんな鬼ババ」

「アルフ！」

以外にもダンテの問いに真っ先に答えたのは、フェイトではなくアルフであった。

「あんたに、フェイトの何が分かるんだよ！」

犬歯を剥き出しにしてダンテを睨み付ける。

「アルフ!!」

「フェイト・・・」

フェイトの声で我を取り戻したアルフは、ダンテに謝った。

「ごめん、カッとなりすぎた。」

「いや、良いんだ。どこの家庭にも色々な事情はあるさ」

そうとだけ言い残すとダンテは、頭を掻きながら隣の部屋に行ってしまった。

「ねぇ、フェイト。もう止めようよこんな事！　いつかは管理局にもバレる。そうしたら、フェイトの身に危険が及ぶかもしれない！」

「大丈夫だよ、アルフ。私、強いんだから。」

「大丈夫じゃないよ。バージルだっていないし、悪魔だって出てきた。それに管理局まで出てきたらどうする気だい」

「大丈夫だよ、私を信じて・・・」

「フェイト・・・」

二人の会話をダンテは、扉越しに聞き入っていた。

第5話

〈1〉

翌日、フェイト、アルフ、そして、ダンテの三人は、プレシアの居城である時の庭園に向かうべくマンションの屋上にきていた。

「何であんたが来るのさ」

アルフは、ダンテに問い掛けた。

「何、魔法って言うのを一度しっかりと味わってみたくてね。」

「それなら後で私が、捕縛魔法をお見舞いしてあげるから楽しみにしてな」

「あいにくとＳＭの趣味は無いんで、勘弁願いたいね」

「えすえむ？」

「フェイトの前で変なこと言ってんじゃないよ！」

アルフは、顔を真っ赤にしてダンテを怒鳴りつけた。

「それよりもお前の母さんに会いに行くんだろう、早く行こうぜ」

ダンテは、まるで新しいおもちゃを買ってもらう子供のようにはしゃいでいる。

「う・・・うん。」

ダンテの言葉を聞き軽く頷くフェイトとアルフ

「ところで、お嬢ちゃんは何を持ってるんだ。」

「ケーキです。母さんが喜んでくれるといいなって思って」

「あの人が喜ぶかね？」

「分からない、でもこう言うのは気持ちだから」

そう言うとフェイトは、次元転移の呪文詠唱を始めた。

「次元座標固定、目標時の庭園」

詠唱が終わるとマンションの屋上から三人は姿を消していた。
そして現れたのは、巨大な屋敷を彷彿とさせる庭先だった。

「母さんの部屋はこっちです」

ダンテに道案内をするフェイト
ダンテは、落ち着きなく周囲を見渡している。
そして、三人は、一枚の大きな扉の前にやってきた。

「それじゃ、ちょっと待ってて、母さんの所に行ってくるから」

そう言い残しフェイトは、部屋に入っていく。
残されたアルフは、扉の前に腰を降ろし体育座りを始めた。
まるで何かを拒絶するかのように目と耳を塞ぐ

「どうしたんだ？」

ダンテの問いにもアルフは、暗い表情を隠したまま答えようとはしなかった。
しばしの沈黙が二人を襲う。
しかし、沈黙を打ち破るフェイトの悲鳴が部屋の中から聞こえてきた。
その悲鳴を聞いたダンテは、いつもの調子で部屋に入っていく。
そこで目にしたのは、プレシアがフェイトに魔具を無理やり同化させようとしている瞬間だった。
次の瞬間、ダンテのエボニー&アイボリーが火を吹いた。
打ち出された銃弾は、真っ直ぐにプレシアの手に握られていた魔具を撃ち抜いた。
「おいおい、感動の家族の再開にしちゃ、ちょっとばかし過激じゃないか!?」
ダンテは、手にしていたエボニー&アイボリーをホルスターに収める。
「中々のベッピンさんだが顔色が良くないんじゃないか・・・病院に行くことをお勧めするぜ」
「あなたは、何者?」
「何、通りすがりの色男さ!」
ダンテは、軽くウィンクする。
「邪魔よ!」
そのウィンクを見たプレシアは、不機嫌そうに顔を歪めると、ダンテに複数発の魔力弾を放った。

ダンテは、これをダンスをするように軽快なステップでこれをかわし、エボニー&アイボリーをホルスターから引き抜くと、迫りくる魔力弾に向けて引き金を引いた。

ＢＡＮＧ　ＢＡＮＧ　ＢＡＮＧ

４５口径の弾丸と魔力弾とが空中で炸裂する。

「初めて会う男に対しての愛の告白にしちゃあ、ちょっと過激じゃないか」

「黙りなさい!!」

再度魔力弾を放とうとするプレシアに対し、今度は、リベリオンを抜き反撃する。

飛来する魔力弾を切り裂きながらプレシアに近づいて行く。

そして、全ての魔力弾を切り裂くと、プレシアの前まで歩み寄った。

そして、彼女の胸倉を掴み、こう言い放った。

「生憎と娘に魔具を使わせるような親に言われるようなことは何も無いんでね。」

「魔具の事を知っているのね、あなたは、いったい何者なの?」

「ダンテ・・・悪魔を狩る者（デビルハンター）さ」

「デビルハンター・・・」

「ここは、見かけは綺麗だが、血の匂いの方が鼻につくな」

そう言うと、リベリオンを収めたダンテは、左手専用の黒い拳銃〃

エボニー〟と、右手専用の白い拳銃〝アイボリー〟を抜き放ち、左右に向けて撃ち放った。
放たれた弾丸は、左右にそれぞれいたものに吸い込まれるように着弾した。
弾丸を撃ち込まれたヘル・プライドは、悲鳴を上げて砂になって消えた。
プレシアの私室には無数のヘル・プライドだけではなく、ヘル・エンヴィー、ヘル・レイス、ヘル・スロース、ヘル・グリード、ヘル・グラトニーの姿があった。

「まったく、雑魚の大盤振る舞いか」

ダンテは、そう言うと体の前方で銃を交差させてこう言い放った。

「Ｌｅｔ' ｓ　ｒｏｃｋ　ｂａｂｙ!」

〈2〉
悪魔達との戦闘を開始してから一分足らずで全ての悪魔を片付けたダンテは、再びプレシアに向き直る。

「あれだけの悪魔を一瞬で・・・。」

ダンテの驚異的な戦闘力を前にただただ驚愕するプレシア

「俺が、フェイトを連れて帰る。あんたは、さっさと俺の前から消えな」

「な・・・何を言って・・・」

「俺の気が変わらないうちに消えろって言ってるんだ」

内心ダンテの戦闘力の前に軽く腰を抜かしていたプレシアだったが、ダンテの鬼気迫る雰囲気に呑まれ、苦虫を噛み潰したような表情になりながら、奥の部屋に姿を消してしまった。
ダンテは、フェイトをお姫様抱っこで部屋の外に運び出した。

「フェイト！」

部屋を出てすぐにアルフが走り寄ってくる。
よっぽど心配していたのか目に大粒の涙をためながらやって来たのだ。

「気を失ってるだけだ、安心しな」

「そうかい、ありがとう！　バージルに続いてあんたにも助けてもらうなんてね」

「バージルが、この娘を・・・？」

「あぁ、そうだよ」

ダンテは、意外そうな表情をするとプレシアの私室から離れようとしたが、気を失ったフェイトをアルフに預け、一度私室に戻って行く。
しばらくして出てくるとダンテの手には、潰れたケーキの箱が持たれていた。

「あんた・・・」

アルフは、そのダンテの優しさに瞳に大粒の涙をためながら呟いた。

「さぁ、早く帰ってケーキ喰おうぜ。腹が減った。」

そう言うと、アルフにケーキの箱を渡し、フェイトを抱え上げた。
二人と抱え上げられたフェイトの三人は、転移してきた場所に移動する。

「ダンテは、バージルとどんな関係なんだい？」

「こりゃあ、随分と直球な質問だな」

「答えたくないなら別に構わないよ」

「兄弟さ・・・ちょっと腐れ縁のあるな」

「・・・それじゃあ、あんたも半身半魔なのかい」

「そこまで、聞いてるのか・・・。あぁ、そうだよ、俺の体の半分は悪魔の血が流れてる」

アルフの表情が少しだけ曇る。

「怖いか・・・？」

「いや、フェイトを助けてくれたからダンテもバージルも良い奴だと思ってるよ！」

アルフは、満面の笑みで答えた。
それに対してダンテは、いつものニヒルな笑みで微笑み返す。
などと話しているとダンテの腕の中で覚醒したフェイトが第一声を上げる。

「うわ、ひゃ！」

「お目覚めかなお姫様」

そう言うとダンテは、フェイトを腕から解放した。

「ありがとう」

フェイトは、ダンテに礼を述べる。

「お姫様をピンチから救うのは色男の役目だからな」

「えぇっと・・・」

なんと呼べば良いのか悩んでいるフェイトにダンテが答えた。

「ダンテで良い」

ダンテがそれだけ言うとフェイトは、嬉しそうに笑った。

「フェイト、早く帰ろうぜ。ショートケーキとストロベリーサンデーが喰いたくなってきた。」

「はいはい」

フェイトは、そう言うと呪文詠唱を開始し、詠唱を終えると時の庭園から姿を消していた。

〈3〉

バージルを連れたなのはは、実家に帰ると真っ先に口から出たのは、バージル存在に対する言い訳だった。

家の玄関前で倒れていたと言い訳したなのは

士郎と桃子もそれじゃあ仕方ないと部屋を貸してくれた。
ダンテが居ないことについては、知り合いと会ったから飲みに行くと言って別れたと説明すると深くは言及されなかった。
バージルは、道場に布団を敷き寝かされた。
運んでくる途中でダンテにやられた傷は塞がっていたので特に治療を要する事はなかった。
なのはは、道場の外で空を見上げていた。

『なのは』

『ユーノ君！』

『どうしたのこんな朝早く』

『うん、ちょっとね』

『私ね、やっぱりあの子の事が気になるの』

『フェイトって呼ばれてたあの子のこと?』

『うん、あの子ね、なんだか凄く寂しそうな眼をしてたの・・・それに私を撃った時も、ごめんねって言ってた。きっと理由があるんだと思う、戦ってでもジュエルシードを集めたい理由が・・・』

「そのために俺を連れて来たのか」

念話の最中に会話に割り込んでくる声
振り返るとそこには、手負いのバージルが立っていた。

「バージルさん！」

近づくなのはに向けられた闇魔刀（やまと）の切っ先
一瞬驚いたなのはだったがすぐに冷静さを取り戻す。
「今の念話聞いてたんですか？」
「あぁ、正確には聞こえてきたと言った方が正しいがな」
「聞こえてきたんですか？」
「どうやら念話程度の魔法なら俺にも使えるらしい」
バージルの言葉に驚愕するなのは
バージルは、言葉を続ける。
「助けてもらった事には礼を言う。だがフェイトの事について話す気はない！」
「そんなつもりで言ったんじゃないんです！　ただ私は・・・」
「ただ何だ！」
「フェイトちゃんとお友達になりたいなって・・・」
「フェイトと友達に・・・か」
「・・・お前にできるのか？」
「できるじゃない、するんです、！」
「そうか・・・ならばお前を信じよう、高町なのは」

少し考えたバージルだったが少しの間の後、その重い口を開いた。

「フェイトは・・・」

〈4〉

フェイト、アルフ、ダンテは、街を一望できる展望台に来ていた。

「あるね」

「うん、近くにあるのは確かだと思う」

「あぁ、間違いなく近くにあるぜ、それに奴らの臭いもな・・・」

そう言って眺める先にあるのは、工場が建ち並ぶ工場区である。

「これからどうするつもりなんだ?」

ダンテは、アルフとフェイトに問い掛ける。

「もちろん取りに行くよジュエルシードを・・・」

その言葉にダンテは、軽くため息をついた。

「仕方ない付き合ってやるよ、ただ・・・」

「ただ、どうしたの?」

「自分自身で考えることを放棄するな、あれが自分の母親に見えたなら眼科に行くことをすすめるぜ!」

ダンテの言葉に普段温厚なフェイトが激昂した。

「母さんは私の大切な・・・」

そこで言葉につまった。

「大切な・・・」

ここでフェイトは、自分の過去を振り返った。

《アリシア、おやつよ！》

《アリシア、良い子にしてた》

《アリシア、今日のご飯は何が良い？》

《母さん・・・私はフェイトだよ・・・アリシアじゃないよ。フェイト何だよ。》

「どうやら、ちょっとばかし考えたら答えが出たみたいだな」

「ダンテ、どういう意味だい」

「何・・・後は、フェイト自身の問題だ。要するに娘に魔具を使わせようなんて考える奴が親なわけないってことさ」

頭を抱え考えるフェイト

そんな考える時間もダンテの一言によって遮られた。

「さぁ、行こうぜ目的の場所に・・・未来に進めば自ずと答えが見えてくるものだぜ」

ダンテは、二人を引き連れ工場区に足を運んだ。
目的の場所に着くとそこには、バリアジャケットに着替えた白き魔導師と日本刀を携えた蒼き悪魔が待ち構えていた。
それを見たフェイトもバリアジャケットに着替える。

「フェイト！」

「バージル！」

「ダンテさん！」

「なのは、久しぶりだな」

それぞれが離れ離れだった者の名を叫ぶ。
そして立場を入れ換えるようにダンテとバージルは、歩き出す。
お互いがそれぞれの戻る場所に戻った。

「やっぱり、こっちの方がしっくりくるな」

ダンテは、いつもの軽口を叩く。

「ただいまフェイト」

「お帰りバージル！」

バージルは、フェイトの頭を優しく撫でてやる。
一時の団欒が終わるとお互いに向き合った。

「さぁ、始めようか楽しいパーティーの時間だ！」

ダンテの掛け声を合図にお互いの武器を構え突撃していく。

しかし、その時だった、戦いを邪魔する者が現れたのは

「そこまでだ！」

黒いバリアジャケットを着た少年が、空間転移により双方の戦いの場に割って入ってきたのだ。

「僕の名は、クロノ・ハラオウン。管理局の執務官をしている。話がしたい双方武器を納めてくれ」

そう言われ素直に納めるダンテとバージルではない

フェイトとなのはも同様である。

それを見越していたのかクロノと名乗った魔導師は、四人の手と体をバインドで拘束した。

しかしバージルは、動く手首を器用に使い閻魔刀（やまと）を抜刀し、自身を拘束しているバインドを断ち切った。

その後、すぐに閻魔刀（やまと）を使い、フェイト達を拘束しているバインドを断ち切る。

ダンテも力業でバインドを破壊するとリベリオンを使いなのはのバインドも断ち切った。

それに驚愕したのはバインドをかけた本人であるクロノであった。

「おいおい坊や、真剣勝負に水差すなんて男のすることじゃねーぜ。」

ダンテとなのはの意識が突如現れた侵入者に向いているのを見てチャンスだと判断したバージルは、フェイトに念話を送る。

『フェイト、ここは引くぞ。』

『でも、ジュエルシードが！』

『そんな物、あとで何とでもなる。今は撤退だ！』

『アルフ、今から数えて5秒後に魔力弾を叩き込んでくれ、その瞬間、俺がフェイトを抱えて脱出する。』

『分かったよ』

それから数えること5秒後、アルフの魔力弾がクロノを襲った。

それをバリアで防ぐクロノ

土煙で周りが見えなくなったタイミングでバージルは、フェイトを抱え上げ跳ぶと、コンテナ上に待機していたアルフと一緒に転移魔法でその場を後にした。

少ししてクロノのに通信が入る。

『艦長すみません。もう一組は逃がしてしまいました。』

『あら、その子達だけでもアースラに案内してくれる』

『はい、分かりました艦長』

それだけ言うとクロノは、ジュエルシードを回収し、ダンテとなのは、ユーノに転移魔法を使うと、その場を後にした。